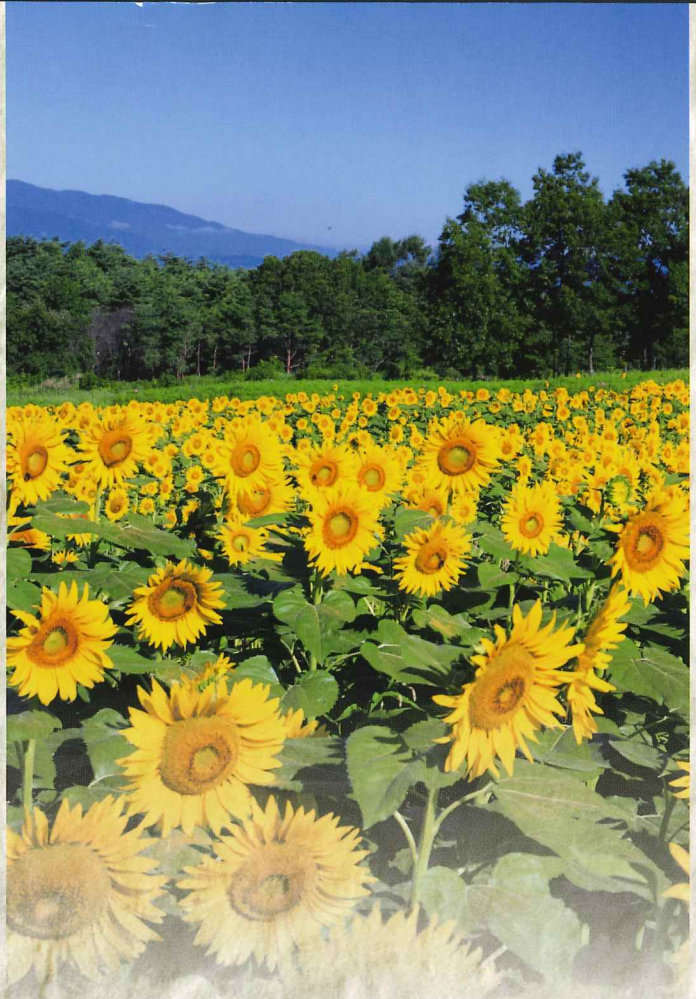
令和四年八月一日発行　毎月一回一日発行

書道研究誌

書の光

8
2022



Vol.648

宮城野書道会

新秋寄楽天（しんしゅうらくてんによす）

劉禹錫（りゅうううしゃく）

月露發光彩
此時方見秋
夜涼金気應
天静火星流
蛩響偏依井
螢飛直過楼
相知盡白首
清景復追遊

月露　光彩を発す
此の時　方に秋を見る
夜涼しくして　金気応じ
天静かにして　火星流る
蛩響きて　偏に井に依り
螢飛びて　直ちに楼を過ぐ
相知尽く　白首なり
清景　復た追遊せんや

露が月に照らされてあざやかな光を放つ、
まさにこの時こそ秋の訪れを感じる。
夜になると涼しく秋の気配が深まり、夜空は静かでアンタレス星が西に傾く。
涼しい秋、秋の気は時期にかない、静かな空に大火の星は低くたれる。
コオロギは井戸のほとりに集まり鳴いて、
螢は飛んで高殿を過ぎていく。
貴方も私もすっかり年を取ってしまったことだし、
この清らかな秋景色をもう一度ともに楽しむこともありますまい。

《楽　天》白居易の字。
《月　露》月に照らされた露。
《　方　》今こそ、もしくは今となって初めてという意。
《金　気》秋の気を言う。
《火　星》さそり座の首星、アンタレスを指す。
《相　知》知人、友人。
《白　首》しらが頭。

劉禹錫（七七二―八四二）、字は夢得。二十一歳で柳宗元とともに進士に合格して官吏となりましたが、たびたび失脚して地方に流されたりします。晩年は同い年の白居易（白楽天）と交際が深く、この詩は劉禹錫が白居易に寄せた詩です。この詩の詠まれた年は不明ですが、尾聯の句からみて、かなり晩年になっての作品のようです。

二十四節気の一つ立秋は秋の兆しが感じられる時期といわれ、今年の立秋は八月七日です。これは暦の上での話で、現在の日本では立秋を迎えても一番暑さの厳しい頃で、初秋とは言えないでしょう。

夕刻を迎え草や葉が冷え、大気中の水蒸気を凝結して露を結び、それが月光に輝くのを見て秋の訪れを感じると劉禹錫は詠んでいます。露は一年中発生しますが、和歌では秋の季語として「朝露」「夕露」「夜露」「白露」など多く使われています。季節感を表現することと同時に、露はすぐ消えてしまうために、はかないものの象徴として使われています。

「夜涼しくして金気応じ」の「金気」は秋の気を言います。世界を支配する五つの気＝五行＝木火土金水を季節に配すると、秋は金に当たります。春は木、夏は火、冬は水で、土は立春・立夏・立秋・立冬の前十八日間を土用といいます。現在では夏の土用だけを指すことが多くなりました。「金気応じ」は、秋の気が時期に応じて訪れたことを詠んでいます。

第四句は「詩経」に見える「七月に流れる火」の句をふまえ、その注釈書の「毛伝」に「火は大火なり、流は下なり」とあり、大火とは心宿三星（和名なかひこぼし）のうちの一つを指し、さそり座のアンタレスを言うそうです。「流」は西にかたむくことです。つまりこの星が傾くと秋になり、だんだんと寒くなってくるのです。

そして第五句と六句で、初秋の象徴的な虫のコオロギと螢を引き合いに出します。これは私の勝手な解釈ですが、井戸端のコオロギは市井の人々か役人たちを表わし、高殿を通り過ぎていくのは、かつて官吏として活躍しながら左遷の憂き目を経験した劉禹錫と白楽天の姿を重ね合わせているかのようです。

最後の二句は、貴方も私ももうすっかり年を取ってしまって、清らかな秋の景色をともに楽しむこともないでしょう。と結んでいます。

詩全体を通して初秋の清涼感が漂いますが、一方で劉禹錫の寂寥感を感じさせる詩です。

参考文献：三体詩（朝日新聞社刊）

人静かにして夜涼を覚ゆ　書帷清樾に傍う　秋虫を陥なうに忍びず　灯を吹いて還って月に就く

《大意》夜は涼しくて人声もなく、書斎のとばりは清らかな木陰にそっている。秋の虫を脅かすに忍びず、灯火を消して月明かりを頼りにする。（査慎行詩・夜初涼）

形気既に和順　肢體も亦安舒

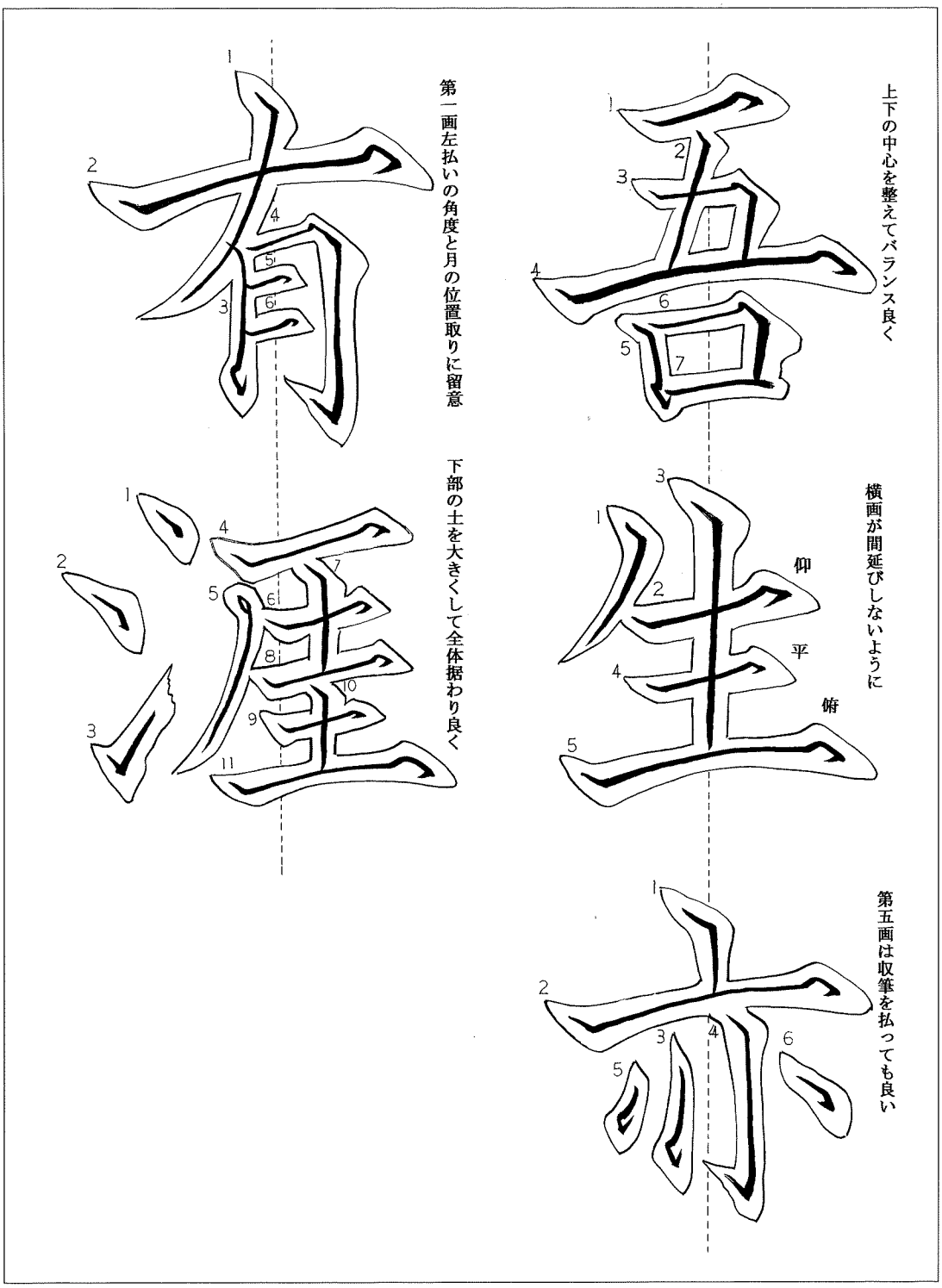
《大意》物質的なものと精神的なものが既に和らぎ柔順であるから、体もまた安らけくのびやかである。

読み　吾が生も　亦（ま）た涯（かぎり）あり（わが人生も有限、やがては死ぬ身）

佐藤象雲書

一般部規定課題出品について

・規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
・規定課題（楷書）の出品はひとり一点に限ります。



連月課題

杜甫詩「春　帰」

苔径臨江竹
　苔径　江に臨む竹
茅簷覆地花
　茅簷　地を覆う花
別来頻甲子
　別来　頻りに甲子
帰到忽春華
　帰り到れば　忽ち春華
倚杖看孤石
　杖に倚りて　孤石を看
傾壷就浅沙
　壷を傾けて　浅沙に就く
遠鴎浮水静
　遠鴎は　水に浮かんで静かに
軽燕受風斜
　軽燕は　風を受けて斜めなり
世路雖多梗
　世路　梗るること多しと雖も
吾生亦有涯
　吾が生も　亦た涯有り
此身醒復酔
　此の身　醒めて復た酔う
乗興即為家
　興に乗じて　即ち家と為さん

行書

草書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

隷書

次号課題

此の身　醒めて復た酔う

ペン字部昇格試験課題（9月2日〆切）

愛は憎しみより高く理解は怒りより

高く平和は戦争より気高い

ヘルマン・ヘッセ

和泉溪石先生書

支部	順位	氏名

※一級以下の方の試験課題です。実施要項は四十六頁をご覧ください。

細字部昇格試験課題（9月2日〆切）

（両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと）

佐藤象雲書

※今月の月例出品はお休みです。

細字部昇格試験課題実施要項

・左記の三体千字文の一節を所定用紙に揮毫
・欄外に支部・段級・氏名を明記して下さい
・〆切九月二日（金）・受験料三、〇〇〇円（税込）

音　ユウコンドクウン　リョウマコウショウ

略解　鵾（こん）がひとり思うままに翔けめぐっている。赤い色の日没の大空をわがもの顔で舞い遊ぶ。

宣揚勝業

勝業を宣揚せり

象雲臨

■褚遂良（ちょすいりょう）・雁塔聖教序（がんとうしょうぎょうのじょ）（初唐・西暦六五三年）の臨書 (67)

『宣揚勝業』

褚遂良の書は「青瑣（宮殿の門）嬋娟（あでやかで美しく）として羅綺（うすぎぬ）に勝えず」と称されています。この雁塔聖教序は褚遂良五十八歳晩年の書ですが、残されている伊闕仏龕碑（四十六歳書）孟法師碑（四十七歳）房玄齢碑（五十四歳）などを比べてみると、晩年に入るほど力を抑え筆画を細くして、流麗さが加わります。外柔内剛という言葉があります。この雁塔聖教序は、字形はゆったりとして変化があり、時には行書的な筆遣いもあります。しかし筆画は細くても力が籠り、まさに外柔内剛と言えます。

「宣」ウ冠の右側転切は切断して運筆にリズムがある。

「揚」旁は細線で特に下部は線を離して明るい。

「勝」月の第一画は左に湾曲して筆勢を出し、旁は行書的な結体。

「業」上部を広く幅を出して、中央部が緊密。二点は十分に離す。

真のみにて草に通ぜざれば、殊に（翰札に非なり）

象雲臨

■孫過庭・書譜（初唐・西暦六八七年）の臨書

(48)

『真不通草殊』

「楷書ばかりで草書に通じていなければ手紙文が書けない。」という一節です。そして各書体の特徴について細かに解説しています。孫過庭は王羲之・王献之の書を学び、書譜は唐時代の草書の名品ですが、六朝以来の伝統を踏まえた書論としても書道史上重要な作品です。

孫過庭に関しては正史に記載がなく、その生涯に関しても諸説があり明確ではありません。

官位は低く宮中で活躍したような文官でもないようですが、書譜の記述内容は鍾繇、張芝、王羲之、王献之の四賢を論じ、また様々な故事を引用して、華麗な文体といわれる駢儷文を用いて書論を展開していることから見て、相当な学究と修練を重ねた書家であったようです。